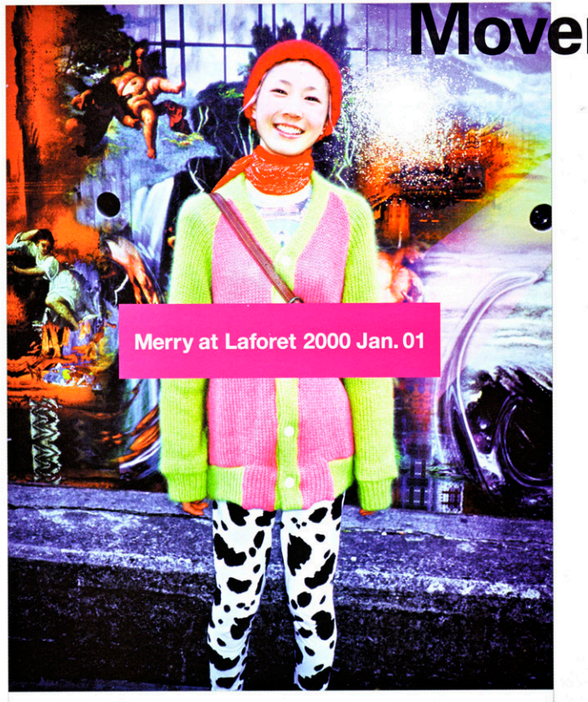

Movenent of new creation

Merryってこんなこと？　紀元2000年のスマイル

keyword：テクノロジーが生み出すスピード感、ライフ感

すべては一冊の写真集から始まった。
旅先で偶然出会った子供たちの笑顔を納めた水谷孝次初の写真集『Merry』が上梓されたのは99年12月。
そして屈託のない笑顔に包まれたこの写真集は、ひとつのアートプロジェクトへと昇華した。
原宿に集う少女たちの姿をカメラに収め、ライブでポスターを制作するその計画は、
「Merryってこんなこと？」と名付けられた。
テクノロジーが生み出すスピードとライブ感、
そしてアナログなコミュニケーションが生み出す安堵感。
アートディレクター水谷孝次の挑戦。

写真集『Merry』（オンワード社）

もし写真集『Merry』について一言で表わすなら、それは「喜びに満ちた一冊」という言葉があてはまるだろう。バスの中で偶然出会った子供たちとのほんの数分の交流を、自ら写真に記録し、スピード感溢れる蛇腹形式の本にまとめあげる――著者であるアートディレクターの水谷孝次さんはこの計画を『写真で語る幸福論』という言葉であらわした。

「来年は今世紀最後の年。でもセイキマツという言葉から連想する暗っぽい話題はやめにして、ポジティブに楽しく過ごしたい。そう思って、自分に何が出来るだろうかって考えてみたんです」。

そんな問いかけかけは半年後、一冊の本として結実した。完成した『Merry』は、すべての人を幸せな気持にしてくれるピュアでポップな雰囲気に包まれていた。

この写真集『Merry』の出版に連動したアートイベントが2000年の1月、原宿で開かれることになるという。イベントは原宿に集まる少女たちの笑顔をカメラにおさめ、その場で大型ポスターを制作するというもの。水面に投げられた小石が大きな波紋となるように、小さな写真集の企画は意外な反響をもって受け入れられたようだ。そのメイキングを取材すべく、12月、水谷さんのもとを訪ねた。

コミュニケーションの力を取り戻す

オフィスにはイベントの準備に追われる水谷さんの姿があった。ライブで制作する作品とは別に、会場を構成する数百枚のポスターを用意するため、ほとんど毎日のように原宿で撮影を行っているという。撮りためた数千枚のフィルムには、肩の力の抜けた少女たちの笑顔があった。

「イベントの準備にあたって最初に考えたのは、写真集のMerry（楽しい）な気分をどうしたら伝えられるかでした。写真集のパネルを並べただけで、本当に観る人の心を掴むことができるだろうか。共感してもらえるだろうか。そう考えるうちに、身近に感じてもらうには、少しぐらい本から離れてもいいんじゃないかと思うようになってきたんです」。新たに原宿の女の子を被写体に選んだのは、そうした身近な感じやMerryな気分が、こく自然にあらわれていたからと、水谷さんは言う。

観客とのコミュニケーションという意味ではもうひとつ気掛かりなことがあった。それは最近とみに、ポスター展や写真展に対する一般の関心が薄れていることだ。そこで今回のプロジェクトでは、見る側が楽しめるようなアイデアを随所に折り込んでいくことにした。そのひとつが、ポスター制作の過程をライブで見せていくことである。当日は最新のデジタルカメラと大判インクジェットプリンタ（エプソン　マックスアート　PM-9000C）、MacintoshG4によるパフォーマンスが楽しめる予定という。

「最近思うのが、ポスター展でもなんでも、デザイナーが仲間内でテクニックを競い合うだけになっているんじゃないかと…。でも、そのポスターが街に出た時、一体どれだけの人が振り返ってくれるだろう。そう考えると、コミュニケーションがこれだけ難しくなっている時代に、デザインの完成度ばかりに気をとられていていいのだろうか。ライブでポスターを作るのは、そうしたこれまでのグラフィックデザインのコミュニケーションに対する、僕なりのアンチテーゼでもあるんです」

テクノロジーとこころの融合

大判インクジェットプリンタで出力した試作中のポスターには、ラフなスナップ写真に少女たちの手書きの文字が添えられていた。これも「コミュニケーションの手がかりになれば」という水谷さんのアイデアだ。写真は気分を重視し、多少ピントが甘くても雰囲気をとらえたカットを優先的に採用した。会場には、当日制作されるポスターとは別に、こうして事前に制作されたパネルが300枚以上展示される予定という。

「ピントの甘い写真もプリンタによる出力も、素人の手書き文字も、広告のデザインでは本来許されないものでしょうね。でも今回はひとつひとつの要素より、会場全体の空気や気分をとらえてほしいんです。それにこうした要素が技術の力でスピーディーにひとつになった時、そこに完成度を越えた力のようなものが宿ることがあるかもしれない。それが新しいコミュニケーションへのヒントになれば、それでいいと思うんです」

デザインが洗練されていく過程で失ってしまった手触り感や感動を取り戻すこと。水谷さんが目指すのは、そうしたデザインが本来持っていたプリミティブなパワーの復権なのかもしれない。テクノロジーとこころの融合から生まれる新しいコミュニケーション。一冊の写真集をきっかけに、アートディレクターの挑戦が始まろうとしている。

会場を飾るポスターの撮影に余念のない水谷さん。撮影は基本的に水谷さんのアシスタント1名で、ほとんどラフォーレ原宿周辺で行う。まず通行する人波の中からモデルを選ぶとアシスタントが声をかけ、次に水谷さんが写真集を見せながら企画説明を説明。撮影後は雑誌のスナップを撮り、声を掛けた後、アンケートに応えてもらう。この間5分ほど。ちなみにモデルの選考基準は「Merryな笑顔とその原宿っぽさ」とのこと。右下は初期の会場イメージ。

ポスターの出力には台の大判インクジェットプリンタ（エプソン マックスアート PM-9000C）を使う。小刻みに振動しながら、30分ほどで1枚のポスターを出力していった。

当日、ライブで完成したポスターは会場だけでなく周囲やラフォーレ店内にも掲出される。会場の舞台スタジオには、デジタルカメラとレイアウト用のパソコン、大判インクジェットプリンタが設置される予定。

Merry at Laforet 2000展を開催

東京・ラフォーレミュージアム原宿とラフォーレ原宿新内にて写真&ポスター展「Merry at Laforet 2000」が、2000年1月4日（木）～16日（日）まで開催される。会場では写真「Merry」の展示はか、一般参加のポスター展「あなたのMerryをポスターにします」、その場でオリジナルポスターがかれる「Merryカードをつくろう」などを予定。入場料300円。

問い合わせ：ラフォーレ原宿 TEL.03-3475-0411

みずたに・こうじ

アートディレクター。1951年生まれ。日本デザインセンターを経て、83年水谷事務所を設立。84年JAGDA新人賞、東京ADC賞、ワルシャワ国際ポスタービエンナーレ展金賞、銀賞、特別賞、NY.ADC国際展金賞・銀賞、99年デザインフォーラム公募展銀賞はか国内外で多数受賞。

空間デザイナーの吉岡徳仁さんに聞く

音で空間をつくる　*TOKUJIN YOSHIOKA*

「Merry at Laforet 2000」展の会場構成を手がけるのは、イッセイミヤケなどの空間デザインで知られる吉岡徳仁さん。吉岡さんに今回の会場構成について聞いた。

「会場のコンセプトは『音で空間をつくる』。ポスターをスピーカーにするシステムがあって、これを使って400枚くらいポスターを作ります。そのポスターから女の子たち本人の声を流して、パーティー会場みたいにざわざわおしゃべりしているような空間にしようと考えています。

これを考えたのは、それまでのポスター展というと、グラフィックデザイナーや写真家が見るためのものという感じがあまりに強いったから。一般の人との接点が希薄で、わかる人だけがわかるという感じ。でも多くの人に見てもらうには、子供でもわかるような明快さ、わかりやすさが大切。そこで空間気を伝えるひとつの要素として、音に焦点を当てることを考えました。

今回の企画は、その辺を歩いてるなの子をポスターにするという点が気に入ったんですが、コミュニケーションという点でも、すごく面白いことができるんじゃないかと思いました。『音』といっても、ただ普通のスピーカーから声を流すだけではつまらないので、ポスターでないとできないような表現手法にしようと、新しい技術にも挑戦しています。

僕は不思議なものが好きで、いつも意外なものをつくろうと思っています。というのも、なんだろうとか、アレっていう、人を惹きつける何かがないと、広くコミュニケーションすることはできないと考えているから。「これはグッドデザインです」と言っても、人の価値感はいろいろで、その良さというのはなかなか広がりません。作品に動きやテクノロジーを取り入れるのは、不思議や驚きは多くの人にとってコミュニケーションのきっかけになると思うからです」

吉岡さんが手にするのはポスターをスピーカーにするためのシステム。この小さなボックスの極地面がスピーカーになる。これをパネルの中央部に貼り、両面にポスターを貼り付ける。実際に使ってみると感じたのでなく、机や壁、窓ガラスにも使用できるう。振動も極めて少ない。オーストリア製で東陽などで使われているという。